

はじめに

中国研究、とりわけ中国内外の研究者にとって同時代の中国を対象とした研究は、少なくとも二〇世紀初頭以来、今日に至るまで長きにわたって方法論上の歪みをともなってきた。

典型的な歪みは中国人研究者自身も、また欧米人・日本人研究者も、いずれも明末清初以前の王朝時代の中国を文明的にまた文化的に高く評価し、時にはこれに尊崇の念さえも抱きながら、清末以後の近代中国に対しては文明的文化的に低く見て、時にはこれに軽侮の念を抱くという傾向に見られる。そしてその延長上に内外研究者は同時代の中国を研究する際に、同時代中国の社会を他の同時代の先進諸国社会に比べて、発展性において不当なまでに後れた社会と見なす偏向を生んだのである。この偏向は戦前戦後を通じて顕著だったが、今日の高度発展下にある同時代中国についての中国観にもなお看取することが出来る。

清朝の前期と後期でこのように評価が大きく分かれる理由は、清朝後期に中国が西洋列強と遭遇し、その軍事的政治的圧力に屈して大きく動揺し、二〇世紀初頭にはついにいわゆる「半植民地状況」に陥ったからにほかならない。

しかしよく考えてみれば、十八世紀末の乾隆年間から十九世紀前半のアヘン戦争勃発までの半世紀にも満たない間に清朝統治が内部的要因のみで文明・文化の劇的な頹落を見たとは到底言えない。確かに乾隆末期に各地に白蓮教組織の拡大があり、嘉慶期の初め 1796 年から 1804 年にかけて白蓮教の大規模反乱が勃発して、清朝の土台を揺るがし、その疲弊を招いた事実は存在した¹。しかしそのこと自体がただちに中華世界の文明・文化の根底的な頹落を結果したとは言えない。繰り返して言えば明らかに中華世界の文明・文化に対する内外評価の激変は、道光年間に本格化する西洋列強との出会いと軍事的敗北に由来する。

本来この西洋列強との出会いの衝撃（ウェスタン・インパクト）とは別に、当然中国社会内部から生じる社会変動要因が存在したはずである。しかし周知のようにその内的変動要因はウィット・フォーゲル²やマックス・ウェーバー³の主張に見られるように「停滞的無限循環的な社会」の力学しか持たないものと長い間見なされてきた。つまり外部的要因を捨象しても、中国には十九世紀以後、西洋列強の圧迫によって崩壊への道を歩む内的かつ必然的な脆弱性が存在したのだという議論である。

「アジア社会停滞論」の持つこうした一面性については、1978 年にエドワード・サイードが「オリエンタリズム」の名の下に本格的な批判に先鞭をつけた⁴。サイードが直接批判したのは必ずしも東アジア、中国に対する西欧の観念ではなく、むしろアラブ、イスラム、中東地域に対する西欧の歪んだ観念だったが、続いて 1985 年に P・A・コーエンが中国研究に見られてきた中国観の歪みについて大著『中国における歴史の発見』（日本訳名「知の帝国主義」）を公開

¹ 佐藤公彦「清代白蓮教の史的展開：八卦教と諸反乱」（青年中国研究者会議編『続 中国民衆反乱の世界』汲古書院、1983 年）。同「嘉慶白蓮教反乱への道程：清代白蓮教の史的展開その二」（中国民衆史研究会編『老百姓の世界：中国民衆史ノート』研文出版、1986 年）。

² カール・A・ウィットフォーゲル著、アジア経済研究所訳『東洋的専制主義：全体主義権力の比較研究』アジア経済研究所、1961 年。ウィットフォーゲル・湯浅赳男共著『オリエンタル・デスポティズム：専制官僚国家の生成と崩壊』新評論、1991 年。

³ マックス・ヴェーバー著、森岡弘通訳『儒教と道教』筑摩書房、1970 年。

⁴ Edward W. Said *Orientalism*, Vintage Books, Paperback, 1978. エドワード・W・サイード著、今沢紀子訳『オリエンタリズム』上下、平凡社、1993 年。

して根本的な批判を行った⁵。

サイードやコーエンによる批判は、要約して言えば、世界史の「近代」は東洋と西洋の出会いによって生じ、その出会い以前には西洋は西洋（オキシデント）としての、東洋は東洋（オリエント）としての自己認識も持つことはなかったということ。さらにこうした西洋・東洋の自己認識の確立とともに、そこに「西方中心主義」「東方従属主義」とも形容できる東洋観、西洋観の歪みの構造が確立したこと。その歪んだ観念構造は西洋・東洋双方の相互了承の下に成立する「共同主観」の構造をなしていること。などを明らかにするものだったのである。こうした批判はアジア・アフリカ研究を主とする地域研究の学界で1980年代以後大いにもてはやされた。にもかかわらず、実際の研究においては今日でも依然としてこの「オリエンタリズム」の歪んだ構造は克服されたとは到底言いがたい。それはなぜか？

世界の思潮としてはデリダによって1967年の著作「エクリチュールと差異」⁶などによって、言葉の内側に階層的な二項対立が存在する場合に、その観念構造を突破し崩していくことが思想的に主張され、これが1970年代後半には「脱構築」として世界的な思潮を形成する状況があった。「オリエンタリズム」批判もまさに「東洋と西洋」という二項対立の言葉（エクリチュール）とその構造を批判するものという点では、この「脱構築」の流れの一つだったと言えたのである。その意味で中国研究にも「脱構築」が求められたし、およそ全世界の中国学界でこの点は合意されていた。問題はたとえ「脱構築」の哲学が「階層的な二項対立の言葉の構造」を破壊する方法を普遍化させたとしても、同じ言語構造が再生産されることを止める積極的な方法はなお確立し得ていなかったという点にある。それは現になお中国研究の世界に根の深い「オリエンタリズム」の弊害が歴然と見られることが何よりも雄弁に語っている。

私たちI C C S方法論分科会が目指したのは、まさにそのような積極的な方法を全世界共通の統一的方法論として確立し、ひいては「現代中国学」を樹立することだった。

この点で出発点となったのはコーエンの観点である「歴史軸」からとらえる仕方だった。溝口雄三と金観涛の両氏が、まず何よりも縦糸（歴史時間軸）からこの点を提起した。と言うのは東洋にとって、「オリエンタリズム」は同時代の西洋の遭遇という横糸（世界空間軸）からの外発的な東西関係の視座に生じる二項対立的な支配従属の歪みの構造として登場するが、縦糸（歴史時間軸）である内発的な発展の視座からこれをとらえ直すことによってその歪みを正すことが出来ると考えるからである。いわばそこに横糸によっては隠され見落とされていた二項対立を中国が「発見」される。溝口はその「発見」を清末民初期の「地方自治」の展開の中に見ようとした。これに対し、金観涛は縦軸（近代史）の中に登場する膨大な文献資料をデータベース化することによって、そこで使用されているいちいちの概念（コンセプト）が、いかなるコンテクスト（文脈）の中で、どのような意味に用いられたか、またその意味がどのような歴史の変遷を遂げたかを検証する方法の有効性を提起した。金氏はこの方法によってデリダのいうエクリチュール（言葉）における時間軸からの内発的な変化（発展）を明らかにすることが出来、東西関係軸から生じる視座に含まれる二項対立的な支配従属構造の歪み（差異）を克

⁵ Paul A. Cohen *Discovering History in China : American Historical Writing on the Recent Chinese Past*, Columbia University Press, 1985. コーエン著、佐藤慎一訳『知の帝国主義：オリエンタリズムと中国像』平凡社、1988年。

⁶ デリダ著、若桑毅訳『エクリチュールと差異』上巻、法政大学出版局、1977年。同下巻、梶谷温子訳、法政大学出版局、1983年。フランス語原著は1967年発行。

服しうると考えるのである。

こうした提起に対して加々美はその有効性を高く評価しつつも、むしろ横糸と縦糸を二項対立的にとらえることの限界を指摘した。横糸と縦糸は現実には相互連動的に働くのであり、それゆえに縦と横を有機的に結びつけた新たな視座こそが「オリエンタリズム」に示された歪みを正す上で必要であると見たのである。

以上の論争が出発点として、どちらかと言えば「オリエンタリズム」を原理的にとらえて演繹的な方向から問題を提起したものだったのに対して、劉新は具体的状況から帰納的に問題を提起することの重要性を訴えた。すなわち 1990 年代以後の今日の中国社会には言葉（エクリチュール）世界の時空両軸が劇的な変化を生んでおり、その言葉世界の中に起こり得る歪みの構造を具体的にとらえることの必要性を訴えたのである。

劉の言う 90 年代以後の言語の時空の激変は、加々美のいう縦横双方の軸の相互連動性が驚異的に高まったことに由来している。具体的には従来中国の内と外の世界を区分してきた切れ目が急激に失われたことによって、内世界の内奥に存続してきたプレモダンと、IT や高速交通に代表される外世界のポストモダンが今や直接に連動する状況が生じた。その結果、中国社会にはプレモダン、モダン、ポストモダンが同時同空間的に混在し、言葉の時空間に激変が生じているのである。この点を帰納的に明らかにする新たな文化人類学的方法論が必要だと劉新氏は説いた。

劉の問題提起に方法的に応える方途は、歴史軸（縦糸）から言葉（概念、コンセプト）を積分的に構築することで形成される金観濤のデータベースを、さらに世界空間軸（横糸）から全世界へと発展させることによって見出すことが出来る。すなわち中国だけでなく他の発展途上諸国、欧米・日本においても同様のデータベースを構築することによって、その意味変化の相互連動性を顕在化させるという方法である。方法論セッションはこの方法が中国の内世界と外世界の今日の劇的連動に対応する方法となりうるとする見かたでほぼ一致した。

こうした論議が重ねられる中で、フューラーも古典中国研究における文献研究と同時代中国研究におけるフィールド調査研究をつなぐ視座が求められていると主張した。元来、古典研究と同時代研究とは文献とフィールドという全く異なる方法が採られ、相互の方法的異質性が結果的に相互の融合を阻害してきた。しかし今や古典と同時代中国をめぐる歪んだ二重評価（古典への尊崇、同時代への軽侮）が方法的に克服されねばならないとすれば、その二重性を突破する視座や方法として、「言葉のデータベース」の時間、空間の両軸における結合は極めて高い有効性を有すると思われる。

以上の方法的問題は、今や地球世界を席卷しつつある「ナショナリズム」の問題とも深くかかわっている。と言うのは 90 年代以後の激変の中でも、「ナショナリズム」の言葉（エクリチュール）のあり方に明瞭な変容が起きたからである。加々美は今日の「ナショナリズム」がかつての「有根のナショナリズム」から「根」を喪失して「無根」化への道へと急激に変容している点を強調する。中国ではかつて抗日戦の時代、「反日ナショナリズム」は村落共同体（コミュニティ）防衛の「抵抗のナショナリズム」として、常に具体的イノチの時空のリアルな場に発する内発性を持っていた。この点は戦後米軍の占領下にあった日本の「反米ナショナリズム」にも同じことが言える。このようなイノチの場（「根」）に立脚する「ナショナリズム」を加々美は「有根のナショナリズム」と呼ぶ。つまりそれは横糸（世界空間関係軸）から来る外発的な支配従属の歪みの構造を、縦糸（歴史時間軸）に由来する内発的な抵抗の力学によって克服

しようとしていたということだ。

内発性の力学は溝口が「地方自治」発展の内発的意義を、横糸から生じる列強の外発的圧力に対抗するものとして強調したように、常に歪んだ支配従属の言語構造を変える働きを持つ。そこには政治的言語を脱色化する民衆の「非政治の言語」がイノチの場の言語として登場するからである。この点を竹内好の文学の側面から論じたのが、岡山麻子だった。竹内文学の本質は、国家にからめとられない民衆の等身大のイノチの場である「非政治世界」を抵抗の根として描くことにあった。言い換えれば、民衆社会の等身大の「非政治」世界から国家の「政治」世界を撃つという側面が重視されたのである。そうした「非政治」世界のイノチの場を竹内は「根拠地」と呼んだ。そこでは言葉としては支配従属の構造を脱色化する作用が働く。

しかし今日、こうした「非政治」から「政治」へというベクトルを持つ「有根のナショナリズム」が中国でも日本でも急速に衰弱を開始している。具体的に中国の場合、「反日ナショナリズム」の言説の大半が近年ではインターネット・ウェブサイトという擬似空間（ヴァーチャル空間）を舞台として登場しており、イノチとイノチの場（「根」）を守るという「有根」の性格を喪失しているからである。この点は全く日本の場合にも当てはまる。日本社会の「反中ナショナリズム」もまた具体的生存空間ではなしに圧倒的にインターネット・ウェブサイトなどの擬似空間を舞台とした、「根」を喪失した言説に依拠しているからである。田島英一は以上のような擬似空間化した「ナショナリズム」の変容を、具体的な中国の現実 に即して分析し、その問題点を列挙した。

最後にウラディン・ブーラグはこうした「ナショナリズム」の変容を、政治人類学という新たな視座から、とくにモンゴル、ウイグル、チベットなどの少数民族と漢民族の交差する言語世界における意味転換として論じた。具体的には「蒙奸」「維奸」「蔵奸」そして「漢奸」の意味転換が複雑に生じている。そこにはデリダの言う二項対立的な「差異」を越えた、より多角的多岐的な構造が現れる。

結論的に言えば、新たな方法論構築の視座の獲得のためには、内発性、外発性の動力学の担い手となる内世界、外世界の諸々の主体のすべての目的意志を包括してとらえる主客合一の視座の方法的確立が求められる。中国学は古典研究であれ同時代研究であれ、研究対象自体の中に多数の主体が現れ、そのどれもが目的意志を持つものとして存在する。研究主体としての研究者はそうした多数の主体との間で縦糸（歴史時間軸）においても横糸（空間関係軸）においても主体的に連動しながら対面しなければならない。そこでは当然にも主客は存在論的にも認識論的にも相互連動し融合する。そうした主客融合の方法論をここでは暫定的に「Co-Behaviorism」と呼称しておく。

残された課題は尚多い。最後にこの新たな方法論の萌芽について多くの議論や論争が生じることがあれば、これに優る喜びはない。

2007 年 3 月
中国学と現代中国学構築研究会主査
加々美光行